

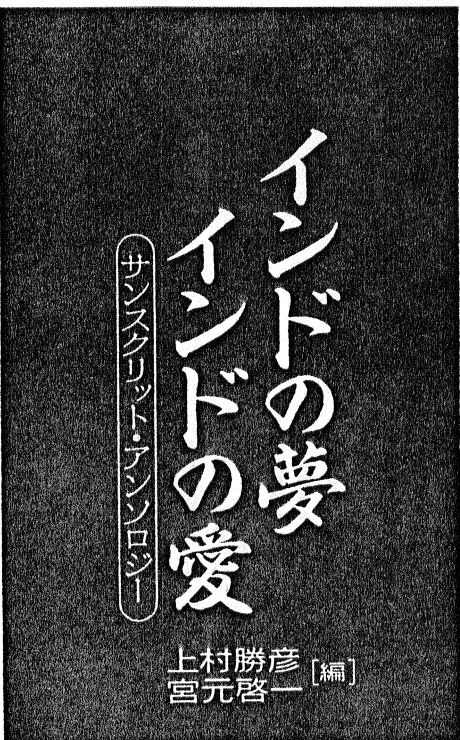


1.1994

11.9070

リチュ → リチ

ヴァーチ → ヴァーチ



春秋社

目次

はじめに

第一章 神々の原風景——ヴェーダ 3 後藤敏文

- 1 蛇を殺す神 9
- 2 脇腹から生まれた捨て子 14
- 3 水の誓い 18
- 4 夜の太陽 22
- 5 ばくち打ち 25
- 6 巨人の解体 30

第二章 宇宙を操る祭式——ブラーフマナ 43 後藤敏文

- 1 アグニの密通 48
- 2 戦車競走 49
- 3 呪法の起源 50
- 4 祭式の治療 53

第三章 隠された原理——ウパニシャッド 63 後藤敏文

- 1 ことばによる決闘 67
- 2 死にゆくとき 72
- 3 賭博好きな王 80

第四章 インド精神の元型——叙事詩 91 上村勝彦

〔1〕最初の美文——ラーマーヤナ 94

1 インドラの不倫 95

2 羊の擧丸 97

3 シヴァ神の宝弓とシーター姫 99

4 弓を折りシーターを得る 102

〔2〕混沌の縮図——マハーバーラタ 105

1 遠い記憶 106

2 戦争への道 108

3 ここにないものは他にない 112

第五章 増殖する古伝承——プラーナ 119 横地優子

1 大海の中で眠る神 123

2 プラーフmana殺し 132

3 世界を破壊する踊り 144

第六章 流出する世界——哲学 I 153 宮元啓一

1 有からの流出 157

2 二元論と流出説 164

3 流出の根源 169

4 プルシャと解脱 172

5 シャンカラの「有の哲学」 176

第七章 小宇宙としての自己——哲学 II 187 宮元啓一

1 プラフマンとアートマン 191

2 なんじはそれである 193

3 われはブラフマンである 199

4 アートマンとは何か 200

5 あらず、あらず 208

6 アートマンへの愛 210

7 無明の所在 217

第八章 輪廻と主宰神——哲学Ⅲ 宮元啓一

1 死後の行方 235

2 アートマンの大きさ 241

3 不平等な創造 244

4 神の戯れ 247

第九章 神となる道——タントラ 高島淳

自己の身体において行なわれる供養 260

第一〇章 様々なる意匠——古典文学 上村勝彦

1 滑稽のラサ 287

2 遊女の純愛 290

3 詩聖カーリダーサ 295

(1) 神々の秘め事 297

(2) 世紀末のヒーロー 299

4 権謀術数の政治劇 303

5 悪女の物語 311

(1) 浮気妻の口車 312

(2) おめでたい悪女 314

(3) 鼻を噛み切られた女 317

(4) 夫の報復 321

第二章	醒めた眼差し——占星術・医学	355	矢野道雄
(1)	天空の仕組み——占星術	358	
	1 日月を食う悪魔	360	
	2 家にまします女神	363	
(2)	人体の機能——医学	367	
	1 飽食の戒め	368	
	2 死の前兆	373	
第三章	聖化された空間——建築	381	小倉泰
	1 身体と呼応する土地	385	
	2 寺院・都市の設計とマンガラ	392	
	3 儀礼としての寺院建立	404	
〔付章〕	「ギータ・ゴヴィンダ」と細密画——美術	36	小倉泰
	参考文献		
	翻訳箇所一覧		
	執筆者一覧		

はじめに

かなり以前のことになる。ある先輩のインド学者から、大学で一般の学生を対象とする講義で使える、インド文化に関するアンソロジーのようなものは作れないだろうかとたずねられた。なるほど、諸外国には、インドの思想や文学の原典を抄訳して、学生や一般読者に基礎的な知識を提供するソース・ブックの類は多いが、わが国においては、本格的なものは存在しない。辻直四郎先生の『サンスクリット読本』（春秋社）があるが、それは主としてサンスクリット学習者のために編まれたものであった。

ちようどその頃、春秋社の方から、インド文化に関する何かよい企画はないだろうかと打診があったので、先輩から得たアイデアをお話して、検討してみようということになったのである。いろいろと検討しているうちに、単に学生のためだけでなく、インド文化に関心をもつ一般読者を対象とするものを作ることとなった。そこでまずだいたいの枠組みを考えてから、執筆者を選考した。幸いなことに、それぞれの分野の第一人者である気鋭の執筆陣に恵まれたので、あまり構成上の細かい配慮はしないで、それぞれの執筆者に自由に腕をふるってもらうことにした。各人が最も適当と考えるテキストを選んで、解説して抄訳するという、単純な方法を採用したのである。その結果、本書は入門書として小さくまとまることはなく、インド古典の最も美味なる部分を摘み食いするという性格のもの

のになった。各執筆者が全力投球した結果、多少難解な箇所はあるが、努力して読めば十分に読解可能であると信ずる。

従来、インドの思想と文化に関する出版物は、仏教についての書が多かった。しかし、言うまでもなく、仏教はインドの宗教のうちでは概して弱小のセクトであったし、近現代のインドにおいては、わずかに新仏教として残存するのみである。仏教だけに偏ることは、あたかもインドを旅行して、ヒンドゥー教やイスラム教の華麗な文化を見ずして、仏蹟だけを見てまわるようなものだ。その傾向に対する反動であろうか、最近、巷には、仏教以外のインドの宗教と文化に関する出版物があふれている。しかし、残念ながらその大部分は、二次的、三次的な資料を用いてまとめられたものか、旅行記、体験談の類であり、インド古典についての信頼に値する情報は意外に少ないと言わざるを得ない。

春秋社から雄大な選集を出版されつつある中村元先生のモットーは、「原典をして語らしめる」ということである。筆者も原典の翻訳が研究者に課せられた最重要の任務であると考えるものである。重要なインド古典の多くは、英語をはじめとする西欧の言語に訳されている。その豊富な翻訳を基礎にして、欧米の研究者は輝かしい成果をあげてきた。また専門外の知識人も、それらの翻訳を駆使して、より巨視的な立場からインドの思想と文化を論じることができた。日本のインド古典研究者は、インド学に対する一般の無理解を嘆く前に、まず主要なテキストを少しでも多く日本語に訳す必要がある。しかし、商業ベースに乗らないものをあえて出版しようという奇特な出版社も少ないであろう。また、難解な翻訳書を通読する根気のある一般読者もわずかであろう。そこで、本書のようなア

ンソロジーの存在意義があるのである。

本書は一般読者を対象として編まれたものではあるが、決してそれだけにとどまるものではない。ユニークな執筆陣が最新の研究に基づいて自由に腕を振るつたため、しばしば、従来の専門書や入門書に見られない斬新な内容を盛ることができた。結果として、本書はインド学の専門家にも参照されるような付加価値を持つものとなった。ただし、執筆者たちの専門分野の関係上、訳出した原典はサンスクリット語で書かれたものに限定された。ジャイナ教の文献など、プラークリット語で書かれた文献や、タミル語などで書かれた文献のアンソロジーを作ることが今後の課題である。以下、インドの思想と文化を概観しながら、本書に収められたテキストの位置づけをすることにする。

紀元前一五〇〇年頃北インドに入ったアーリヤ人の宗教は、一二〇〇年頃に成立したとみなされる最古の『リグ・ヴェーダ本集』をはじめとする、一連のヴェーダ文献によつて推測され得る。ヴェーダ聖典はシュルテイ(天啓聖典)と呼ばれ、誰か特定の人に作られたものとは考えられず、永遠の過去から存在していたとされる。しかし、実際には作者がいたはずである。ヴェーダを「作つた」聖者は、リシあるいはカヴィと呼ばれた。カヴィという語は、後代には専ら詩人を指すようになった。リシは特別の変性意識の状態に入って、ディーと呼ばれる詩的靈感を得て、神秘力に満ちた言葉を発し、ヴェーダ聖典を「作つた」。いわば言葉そのものが自ずから顕現して、リシは半ば無意識的にヴェーダ聖典の形にしたとすることができよう。つまり、自ずと現われ出る言葉を得る能力に恵まれた詩人が、リシでありカヴィなのである。後代のインドでは、言葉の持つ超越的な実在性を強調す

る学説が有力となったが、その萌芽は、すでにヴェーダ聖典の制作過程そのものの中にあつたと考えることが可能である。そしてここには、詩人は言葉の神秘力を感得する靈能に恵まれた天才であり、卓越した知性をそなえた聖者であるとする、古典インドの伝統の源流があると思われる。

本書第一章において、執筆者は「リグ・ヴェーダ」からいくつかの讃歌を選んで訳出し、解説を加えている。このヴェーダの訳としては、すでに辻直四郎先生の定評ある抄訳があるが、執筆者は最新の学説に基づき、さらに斬新な独自の解釈を披露している。

ヴェーダ祭式の重要性が高まるにつれ、祭式をめぐる議論・根拠付けを内容とする、「ブラーフマナ」と総称される最古の散文文献が作られた。この「ブラーフマナ」も、次に見る「ウパニシャッド」とともに、広い意味のヴェーダに含まれる。「ブラーフマナ」には、祭式に関する行作や聖句の適用次第が述べられているが、その間に種々の説明的な神話が挿入されている。元来、祭式は宇宙の諸現象の模倣であつたと考えられるが、「ブラーフマナ」の頃になると、祭官が正しく祭式を行なえば宇宙の諸現象を正しく維持できると考えられるようになった。すなわち、祭式という小宇宙を操作することにより、それと「同置」される大宇宙を支配することが可能だとみなされたのである。ここに見られる「同置」の原理は、ウパニシャッド以降のインド思想の多様な流れの根底に生き続けた。本書第二章では、「ヤジュル・ヴェーダ・サンヒター」の散文部分と、「サーマ・ヴェーダ」に属するブラーフマナとの一部を訳出する。

ウパニシャッドは、一般には、近くで（ウパ）、下に（ニ）、座る（サッド）という意味に解されている。すなわち、師のそば近くにうやうやしく座って伝授さるべき秘説と解釈されるのである。しか

し、本書第三章の執筆者が、この語を「ものの背後・根底に位置する・存するもの・こと」と解していることは注目に価する。宇宙の背後に存在する最高原理はブラフマン（梵）と呼ばれ、また、真実の自己とも言うべき個人の中心主体はアートマン（我）と呼ばれる。そして、このブラフマンとアートマンを「同置」する考え方（梵我一如）がウパニシャッドの中心思想であるとされる。本書第三章においては、最古層のウパニシャッドから数箇所を選んで訳出する。

インド総人口の八二パーセント以上がヒンドゥー教徒である。今日、インド国内だけでも、六億人以上の信徒がいると推定される。ヒンドゥー教とはインドの宗教という意味であるから、広い意味では、ヴェーダの宗教をはじめとし、ジャイナ教、仏教なども含む場合があるが、一般には、ヴェーダの宗教（バラモン教）が民間信仰、習俗などを吸収して変容した形のことを指す。欧米などの学者は、ヴェーダの宗教をヒンドゥー教と区別する場合があるが、ヒンドゥー教徒としては、ヴェーダはあくまでも最高の聖典である。

ヴェーダ以降のヒンドゥー教の聖典としては、二大叙事詩である『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』、古伝承を集めた多数のプラーナ文献、『マヌ法典』を代表とする法典がある。その他、ヒンドゥー教の哲学諸派の文献、ヒンドゥー教の諸派の聖典である、サンヒター、アーガマ、タントラなどと呼ばれる諸文献が存する。

『マハーバーラタ』は一八巻一〇万詩節よりなる世界最大の叙事詩である。その成立年代は定かではないが、一般には、紀元前四世紀頃から紀元後四世紀頃にかけて成立したとされる。バラタ族の内紛を主筋とするが、その主筋に、多くの重要な神話や学説などが挿入されている。一方、『ラーマ

「ヤナ」は七卷二万四千詩節よりなる。この叙事詩は、英雄ラーマのすぐれた事績を主筋とし、その間に神話などを含むが、「マハーバーラタ」と比較すると、プロットや文体や詩的技法などの点でよりまとまった文学作品である。二大叙事詩の作者と伝えられた詩人たちは、ヴェーダ以来の伝統に従い、いずれも靈感に満ちた聖者である。この二大叙事詩は、後代の文学作品に多くの題材を提供し、また、思想的、文化的に、インドの内外に多大の影響を及ぼした。本書第四章においては、「ラーマ―ヤナ」、「マハーバーラタ」という順序で、それぞれの一部を訳出する。

二大叙事詩とともに、ヒンドゥー教の重要な聖典とみなされる、プラナーナ（古伝承）と呼ばれる膨大な文献群がある。プラナーナは、古くから伝えられた物語・伝説などを集めたものであるが、その他、宗教、哲学、法典、政策論、美術、建築、数学、天文学、占星術、医学、美学、音楽など諸学に関する記述が含まれ、まさに壮大な百科全書と言わなければならない。その成立時期は不明であるが、だいたい四世紀から一四世紀の間に作られたと推定されている。本書第五章においては、最も重要な「大プラナーナ」のうち、「パドマ・プラナーナ」、「クールマ・プラナーナ」、「リンガ・プラナーナ」から、ヴィシュヌ神とシヴァ神と女神に関するエピソッドを選んで訳出する。

ヒンドゥー教の哲学諸派は、古くから六つに分類される場合が多いが、わが国では一般に「六派哲学」と呼ばれる。すなわち、サーンキヤ学派、ヨーガ学派、ヴァイシエーシカ学派、ニヤーヤ学派、ミーマーンサー学派、ヴェーダーンタ学派である。

サーンキヤ学派の開祖はカピラ（紀元前四―三世紀頃）であると伝えられるが、現存する最古の原典は紀元後四、五世紀頃に作られた「サーンキヤ・カーリカー」である。この学派は徹底した二元論

を説き、精神的原理であるブルシヤと物質的原理であるブラクリティとの二大原理を立てる。

ヨーガ派の根本経典は、二世紀から四世紀の間に編纂されたとみなされる、パタンジャリの『ヨーガ・スートラ』である。この学派は理論的にはサーンキヤ学派に近いが、ヨーガの八実修法など、瞑想の実践法を説く点に特徴がある。

ヴァイシェーシカ学派の開祖はカナダ（紀元前二世紀頃）とされる。根本経典は紀元後一、二世紀に編纂された『ヴァイシェーシカ・スートラ』である。この学派は多元論を説き、六つの原理を設定して現象界の諸事物がどのように形成されているかを明らかにする。

ニヤーヤ学派の開祖はガウタマ（一、二世紀）で、根本経典『ニヤーヤ・スートラ』は彼の作と伝えられるが、現在の形に編纂されたのは三、四世紀であると推定される。この学派の存在論や形而上学はだいたいヴァイシェーシカ学派に近いが、特に論証方法、正しい認識方法の確立をめざしたことがこの派の特徴である。

ミーマーンサー学派の開祖はジャイミニ（紀元前二世紀頃）とされる。根本経典『ミーマーンサー・スートラ』は紀元後一〇〇年頃に編纂されたと推定される。この学派はヴェーダ聖典に規定された祭式実行の意義と実行の方法について詳細な考察を行なう。ヴェーダの語は常住とされるので、この学派では語常住論が説かれ、言葉についての考究が盛んに行なわれた。

ヴェーダーンタ学派の開祖はバーダラーヤナ（紀元前一世紀頃）とされる。根本経典『ブラフマ・スートラ』は五世紀頃に現在の形に編纂されたと推定される。この経典に対し、シャンカラ（八世紀前半）などの卓越した哲学者がそれぞれの立場から注釈を著わし、後代、この学派はめざましい発展を

とげた。この学派の主流は一元論であり、ウパニシャッドで説かれた絶対者ブラフマンについて探究した。

本書では、第六章から第八章にかけて、哲学上の種々の問題を論じた諸文献を部分訳している。執筆者はウパニシャッド文献をも紹介しているが、第三章の執筆者がヴェーダ研究の立場からウパニシャッドを抄訳したのに対し、ここでは、哲学上の諸問題を扱う場合に不可欠なウパニシャッドの部分訳出しているのである。

ヒンドゥー教における三大神はブラフマー（梵天）とシヴァとヴィシュヌである。そのうちブラフマーを信仰する宗派は顕著でなく、シヴァ教とヴィシュヌ教とが二大流派を形成した。シヴァ教としては、カシミールのシヴァ派、南インドのシヴァ聖典派、パーシユパタ派、シャークタ派が有力であった。ヴィシュヌ教としては、バーガヴァタ派が特に有力であった。一般には、シャークタ派の根本教典の多くがタントラと呼ばれることから、それらの文献をタントラと総称し、性的儀礼などを行なう秘密の教えをタントリズムと呼ぶ。

しかし、本書第九章の執筆者は、タントリズムをシャークタ派に限定することに異議を唱え、五世紀頃以後に成立した発達したヒンドゥー教（ヴィシュヌ教も含む）の聖典で、神が直接語る形式のものをタントラ文献と呼ぶのが適当であろうと提唱する。タントラ文献の成立年代は不明であるが、現存の文献で古いものは七、八世紀頃に作られたと推定される。タントラ文献の説く主要な主題は儀礼である。あらゆる儀礼において、行者は神となって神を供養するのである。執筆者は、タントリズムにおいて「神となる」部分が本質的に重要であるとする。ちなみに、仏教の密教儀礼においても、

行者は自らが本尊と一体であると観想する。そこにはヴェーダ後期の「同置」の原理が力強く存続している。神に対する最高の供養は、神を知ることであり、神と合一することなのである。

ヒンドゥー教は華麗な文学作品をも後世に遺した。インドの古典文学はしばしばカーヴィヤと称される。カーヴィヤ詩人は、美質に満ちた文体と修辞法を駆使し、鑑賞者にラサ（美的陶醉）を経験させるような作品を作らなければならない。最も重視される詩人の条件は、詩的な閃き、靈感（アラテイバー）である。この閃きは語そのものが本来有する能力であり、詩人はその閃きを感得して表現するのである。詩人がすぐれた霊能者であるというヴェーダ以来の伝統がここに継承されていると言えよう。古典詩の理論書においては、鑑賞者の側にも、そのような靈感、共感能力が要求されている。

第一〇章では、バラタの演劇論、シェードラカの社会劇、カーリダーサの抒情的叙事詩、ヴィシヤーカダッタの政治劇の一部を訳出し、さらに、主として散文で書かれたカーヴィヤ作品とされる説話集から、特に悪女物語を選んで抄訳する。

ヒンドゥー教徒の人生の三大目的は、ダルマ（宗教的社会的義務）、アルタ（実利）、カーマ（享樂）である。すなわち、敬虔なヒンドゥー教徒は、ヒンドゥー教が採用した価値基準を守るとともに、経済的政治的な利益を追求し、同時に、性愛を代表とする種々の享樂を楽しむべきなのである。本書第一一章においては、ダルマ、アルタ、カーマを説く論書のうちで最も重要である、『マヌ法典』（前二世紀―後二世紀頃）と、『アルタ・シャーストラ』（前二世紀―後二世紀頃）と、『カーマ・ストトラ』（四、五世紀頃）との一部を訳出する。

インドにおいても古くから自然科学的な知識が重視されていたが、西洋の科学が次第に神学の拘束

を脱して独立の学問として発展したのに対し、インドの科学は宗教との結びつきを保ち続ける傾向が非常に強かったためにその発展は停滞し、現在ではもはや過去の遺物とみなされる場合が多い。しかし、インドにおいては、自然科学的な学問の代表であるジョーティシヤ（天文学、占星術）とアーユルヴェーダ（医学）は、今日に至るまで、現実の社会に大きな影響力を保ち続けている。特に近年では、アーユルヴェーダはインド国内はもとより、欧米や日本において、西洋医学の欠点を補い、ある意味ではそれを超える医学として脚光を浴び、真面目な研究の対象とされるようになった。もはや宗教的なものと結びついていることは、必ずしも短所とはみなされなくなったと言えよう。

本書第一二章においては、インド最大の天文学者にして占星学者であるヴァラーハミヒラ（六世紀中葉）の代表作『プリハット・サンヒター』と、最も有名な医学者であるチャラカ（一、二世紀）に帰せられる『チャラカ・サンヒター』から、主として文化的に興味ある部分を選んで訳出する。

ヒンドゥー教の美術建築の分野では、「シルパ・シャーストラ」とか「ヴァーストウ・シャーストラ」と呼ばれる一群の文献が存在する。これらの文献では、寺院、都市、村落、城砦、宮殿などの建築法や、図像学に関する知識が提示されている。これらの文献群が作られたのは中世以降のこととされるが、『アルタ・シャーストラ』や『マハーバーラタ』に、すでに建築についてのかなり詳しい記述があり、比較的古いプラナーナ文献にも、建築や図像についてのまとまった章が含まれている。また、ヴァラーハミヒラの占星術の論書『プリハット・サンヒター』にも、建築や図像に関する有益な情報が見出される。

本書第一三章では、『プリハット・サンヒター』、『マリーチ・サンヒター』、『マヤマタ』、『パード

マ・サンヒター』から、建築、特にヒンドゥー寺院建築に関連する部分を取り上げて訳出する。執筆者の言うように、「寺院を建立するという行為全体が、儀礼そのものとして考えられていること」がよくわかる。建立の儀礼の場合も、儀礼を執行する司祭は、自らを最高神と同一であると念ずる。それから、大地女神と儀礼的に交合する。そしてこの受胎の儀式が終了すると、施主は本殿全体が人体であると瞑想する。この建立の儀礼においても、ヴェーダ後期以来の伝統的な「同置」の原理が明瞭に認められるのである。

本書の全体に渡って、『ギータ・ゴヴィンダ』をもとに描かれた細密画を配置した。『ギータ・ゴヴィンダ』は、文学作品としても名品であるばかりではなく、中世のインド美術への影響という点からも見逃すことのできない作品である。そこに付された詞書きの訳文と照らしあわせながら、インド文化の豊饒性を感じとっていただければ幸いである。

本書の執筆者はいずれも、直接間接に原実先生の薫陶を受けている。謹んで本書を先生に捧げた。また、本書の出版のためにいろいろとお骨折りいただいた、春秋社編集部佐藤清靖、浜野哲敬の両氏に深謝する。

一九九三年一〇月

上村 勝彦

インドの夢・インドの愛—サンスクリット・アンソロジー—

